恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響

○片岡 祥¹

(1久留米大学比較文化研究所)

キーワード: 恋人支配行動 恋愛関係 支配行動のズレ

Influence control behavior to romantic partner on romantic relationships

Sho KATAOKA

(1Institute of Comparative Studies of International Cultures and Societies, Kurume University)

Key words: control behavior to romantic romantic relationships difference of control behavior

目 的

恋愛関係の中では, 恋人の行動を制限する行為が生じる (以後, 恋人支配行動; 片岡・園田, 2012). 恋人支配行動は関係に悪影響を及ぼすだけでなく, 場合によってはデート DV などの問題へとつながっていくことが考えられる. そのため, 恋人支配行動のメカニズムを解明することは重要な研究課題の 1 つである.

本研究は, 片岡・園田 (2012) が収集した恋人支配行動を測定する項目群から量的な尺度の開発を行う. その後, 開発した尺度を用いて, 恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響について検討する. 恋人支配行動には行為者と被行為者が存在することから, 本研究ではカップル間の恋人支配行動のズレが恋愛関係に及ぼす影響についても検討する.

方 法

調査対象者

調査対象者のうち, 恋人がいる者 172 名 (男性 52 名, 女性 120 名, 平均年齢 20.01 歳, $SD=2.55$) を分析対象とした.

質問紙

1. 基本的属性を問う項目 参加者の性別, 恋人の有無, 交際経験の回数について回答してもらった.

2. 恋人支配行動尺度 既存の 5 つの尺度の中から, 大学生の恋愛関係の中で生じる恋人支配行動を測定していると思われる 18 の項目を選定して用いた. 調査の際に, “自分がどの程度行っているか” と “恋人からどの程度行われているか” をそれぞれ回答してもらった.

3. 関係係時間的展望体験尺度 親密な 2 者関係についての時間的展望を測定する尺度である. 調査では, 園田・片岡 (2008) が作成した尺度の一部を用いた. 調査に用いた項目は, 充実因子 2 項目, 目標因子 4 項目であった.

結果と考察

分析 1 恋人支配行動尺度の因子分析

現在恋人がいる者 172 名 (男性 52 名, 女性 120 名, 平均年齢 20.01 歳, $SD=2.55$) を分析対象とした.

恋人支配行動尺度に関して, 探索的因子分析を行った (Table1). 固有値と解釈可能性から, 2 因子が妥当であると判断した. そこで, 因子数を 2 に固定した最尤法プロマックス回転を行った.

その結果, 第 1 因子, 第 2 因子共に 5 項目が選択された. 項目内容から第 1 因子を “暴力的支配行動” (説明率 35.11%), 第 2 因子を “束縛的支配行動” と命名した (説明率 17.27%). 因子間相関は中程度の値を示した ($r=.40$). 信頼性係数を算出したところ, 第 1 因子 ($\alpha=.81$), 第 2 因子 ($\alpha=.71$) と十分な信頼性が得られた.

分析 2 恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響

恋人支配行動の 2 因子の行為者得点と被行為者得点を独立変数, 充実得点と目標得点を従属変数として重回帰分析を行った. その結果, いずれのモデルに関しても有意な影響関係は

みられなかった. このことから, 恋人支配行動は行為・被行為に関わらず単独では関係に影響を及ぼさないとはいえる.

次に, 行為得点から被行為得点を減算して恋人支配行動のズレを算出し, 各因子のズレの平均点を用いて参加者を群分けした. そして, 恋人支配行動のズレが充実得点と目標得点に及ぼす影響を検討するために, 2 要因分散分析を行った (Figure1). その結果, 目標得点に関して交互作用項のみが有意であった ($F(1, 83)=8.90, p<.01$). 単純主効果検定を行ったところ, 暴力的支配行動のズレ高群における束縛的支配行動低群と高群, 束縛的支配行動のズレ高群における暴力的支配行動低群と高群に有意差がみられた.

以上のことから, 恋人支配行動のズレは単独では関係に影響を及ぼさないが, 2 つの支配行動のズレが複合した場合に関係に影響を及ぼすといえる. 2 つの支配行動のズレが共に大きい場合は関係に悪影響を及ぼすが, 束縛的支配行動のズレが大きくても暴力的支配行動のズレが小さい場合は, むしろ関係に良好な影響を及ぼすことが示された.

Table 1 恋人支配行動尺度の因子分析結果

項目 (OOは現在・過去の恋人をさす)	F1	F2	M	SD
	暴力的支配行動	束縛的支配行動		
x7 OOをわざといやな呼び名で呼んだり, 罵詈雑言を言う。	.80	.23	1.73	1.47
x8 OOを人前でバカにしたり, 他人にOOの悪口を言う。	.74	.27	1.74	1.38
x11 OOを弄ったり, つかんたり, つねたりする。	.72	.35	1.51	1.28
x12 刃物などでOOを傷つけようとする。	.66	.36	1.17	0.89
x15 OOに性的行為を無理強いしたことがある。	.49	.22	1.26	1.01
x16 OOにメールを送ることを強制する。	.23	.73	1.76	1.46
x17 OOのメールを手紙に見る。	.31	.66	1.65	1.52
x18 OOが自分よりも友人を優先すると私は怒る。	.21	.51	1.76	1.32
x5 OOと喧嘩をするとすぐに謝罪を持ち出してしまう。	.22	.51	2.08	1.78
x1 OOの携帯をみて異性のアドレスを消してもらう。	.24	.47	1.49	1.21

Figure 1 恋人支配行動群の違いによる目標得点の違い